

卒業前技術演習における「多重課題演習」の成果と課題

柄澤 清美・久保田美雪・菅原真優美

新潟青陵大学看護福祉心理学部看護学科

Achievements and Challenges in “Multi-tasking Exercise” as a Part of the Pre-graduation Seminar on Nursing Techniques

Kiyomi Karasawa, Miyuki Kubota, Mayumi Sugawara

NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY DEPARTMENT OF NURSING

要旨

多重課題演習は、複数患者を受け持ちながら「与薬」「状態観察」「検査の準備」「患者の訴えへの対応」など看護業務のシミュレーションを行う演習である。今回A大学看護学科4年生を対象に卒業前技術演習でこれを実施し、演習の目標達成状況、企画の課題を明らかにすることを目的に参加学生への質問紙調査を行った。

その結果、多重課題演習に対する学生の自己評価ならびに目標達成度は低かった。しかし、学生の「できなかった」という自己評価は、自分の力量と課題を具体的に自覚することに繋がり、「援助の前には常に準備が必要であること」「あらかじめ段取りを考える必要性」「優先順位を決めるときの思考」「ミスを引き起こさないための注意」「リーダーに報告すべきこと」「落ち着きや冷静さの重要性」への理解は深まっていた。また、企画の課題は、成功体験を増やすための準備、体験回数の検討、課題に集中できる環境づくりであった。

キーワード

多重課題, 看護技術教育, 複数患者, シミュレーション

Abstract

A multi-tasking exercise is to simulate nursing services, including administration of medications, observation of patient's condition, preparation for examination, and response to patient's inquiries or requests, while handling multiple patients. We implemented this exercise as part of a pre-graduation seminar on nursing art for 4th year nursing students at University A, and conducted a questionnaire survey of the participating students in order to clarify goal attainment and any issues of the exercise.

The results showed that the students' self-evaluation and the level of goal attainment in the multi-tasking exercise were low. However, the students' self-evaluation as “incapable” led to the realization of their specific abilities and problems, and deepened their understanding of the need to always prepare before providing assistance, the need to consider setup beforehand, thinking in deciding order of priorities, precautions to avoid mistakes, the need to report to a leader, and the importance of calmness and composure. The issues of the exercise were preparation for increasing successful experience, examination of the experience frequency, and development of an environment that allows students to concentrate on their tasks.

Key words

Multi-tasking, nursing technique education, multiple patients, simulation

はじめに

現在の看護師養成課程における臨地実習では、資格を持たない学生が実施できる看護技術の範囲は限定され、看護技術の実施の機会も少ない。そして、実習によって身につけられる技術力が臨床において必要とされる能力に及ばない現状は、就職を目前に控えた学生に大きな不安をもたらしている。

このような現状をきっかけにA大学では、卒業直前の学生を対象に基本的な看護技術の習得を目標とする看護技術演習を行い、職場への適応を支援してきた。しかし、卒業生が職場で戸惑うのは、一つ一つの技術の未熟さだけではなく、複数患者を受け持った場合の段取り、業務の優先順位を考えての行動など、業務遂行能力の欠如が原因であった。現在の臨地実習では、学生は一人の患者を受け持ち、時間的な余裕のある中で実践を行っている。その状況下では、複数患者を受け持つ場合に必要な発想や能力を身につけることは困難である。このことは、2009年4月からの新カリキュラムにより「看護の統合と実践」が教育内容として追加されたことから、看護教育全体の課題である。

そこで、今回、卒業直前の看護技術演習の一環として、複数患者を受け持ちシミュレーションする「多重課題演習」を企画・実施した。参加学生の質問紙調査を中心に、その成果と課題を分析したので報告する。

I 多重課題演習について

1. 演習目的

複数患者の受け持ちや予定外の事象への対応などの場면을シミュレーションすることにより、臨床においてメンバーの一員として主体的に自らの役割を発揮するために求められる意識・能力を実感する。

2. 演習目標

- A 一日の業務を効率的に計画できる
- B 連絡・報告が必要な状況がわかる
- C 同時に要求される複数の事象について優先順位がつけられる
- D 習得した技術を様々な反応を示す対象との相互関係の中で安全に提供できる

3. 演習方法

1) 受け持ち患者（表1）

- ① 学生は6人の患者を受け持つ。
- ② 6人のうち2名は模擬患者で、残り4名は紙上患者である。

2) 演習の流れ（表2）

- ① 業務開始前（60分）
 - ・ 1日の行動計画を考えワークシートを記入する。
 - ・ ワークシートには、紙上患者の1日の予定があらかじめ記入してある。模擬患者2名の情報はカルテから収集し、自分で計画を立てワークシートに記入する。
 - ・ 計画した内容をリーダー役の教員に報告し、アドバイスを受ける。
 - ・ 業務遂行にあたって必要な準備を行う（輸液のミキシング、注射の準備、検温に必要な物品の準備など）。
- ② 業務（45分）
 - ・ 業務開始から45分間、実際の看護を行う。この中で予定されていた看護業務のほかに、模擬患者からの予期せぬ質問、反応、訴えに遭遇する。
- ③ 模擬患者からのコメント（15分）
 - ・ 学生は、模擬患者から自身対応の善し悪しについて感想を聞く。
- ④ リーダー役の教員からの講評（15分）
- ⑤ ワークシートの修正（45分）
 - ・ ②、③、④をふまえ、最初に立てた行動計画を見直し、修正する。

表1 模擬患者の一例

	病名	治療・検査・処置	学習内容の一部
模擬患者A	急性腎不全	9時：抗生剤点滴 14時：CT検査 予測指示 体温38.5度以上、疼痛時 メチロン注10% 筋肉内注射	① 疼痛時の観察と説明、優先順位の判断、段取り ② 輸液のミキシング ③ 点滴実施前の観察と排泄の有無を確認 ④ 翼状針による点滴の刺入と固定 （静脈内注射用腕モデルを使用） ⑤ 点滴刺入部の観察と患者に対する説明 ⑥ バイタルサインの測定、有熱時の観察と判断 ⑦ 検査の説明
模擬患者B	心不全	9時：ラシックス1A側管からの 静脈内注射（ワンショット） メインルートの点滴追加	① 点滴交換、ラインへ空気が混入した場合の対応と説明 ② 呼吸状態の観察と対応、リーダーへの報告の判断 ③ 輸液のミキシング、側管からの静脈内注射 ④ 薬剤の作用、副作用の理解、事前、事後の観察 ⑤ 車椅子でのトイレ誘導

表2 演習の流れ

時間配分	60分		45分	15分	15分	45分
内 容	情報収集 ワークシート記入 注射準備	リーダー報告 リーダー指示受け 計画の修正、再確認 再準備	業務	患者役からのコメント	リーダー役の教員からの講評	ワークシートの修正

3) 課題の提示方法

① 模擬患者の情報

- ・模擬患者5名の疾患・治療に関する情報を、演習2日前に提示し自己学習を促した。

② 受け持つ模擬患者の決定

- ・あらかじめ提示された模擬患者5名のうち、実際に受け持つ2名の模擬患者は、演習当日に発表した。

II 研究目的

1. 2008年度の卒業前技術演習における多重課題演習の目標達成状況を評価する。
2. 多重課題演習の問題点と今後の課題を明らかにする。

III 研究方法

1. 対象：A大学看護学科に在籍する4年生。卒業前技術演習に参加し多重課題を体験した49人。

験した49人。

2. 方法：多重課題終了時に自記式質問紙を配布し、記入後、回収ボックスに投函してもらった。
3. 期間：2009年3月4日、5日。
4. 調査内容：「達成度」「理解度」「自己の課題」「多重課題の意味づけ」「多重課題への取り組み」「多重課題に参加して気づいたこと、意見や感想等」である。
5. 分析方法：データの集計と分析には統計ソフトSPSS10.0を使用した。統計学的処理は χ^2 検定を使用し、 $p<0.05$ を有意差ありとした。
6. 倫理的配慮：研究対象者には、書面と口頭で研究の趣旨を説明した。研究への参加は対象者の自由意志によるもので研究参加の撤回や途中辞退も可能であること、質問に回答したくないことは拒否して良いことを伝えた。また、拒否や撤回による成績評価への影響はないこと、調査結果は研究以外には使用せず、質問紙は無記名回答と

し、研究終了後はすべて破棄することを説明し、質問紙の回収をもって研究参加への同意とみなした。

IV 結果

1. 演習の目標達成度 (図1)

演習目標A、B、C、Dを具体化した評価項目を「一日の業務を効率的に計画できた」、「連絡・報告が必要な状況について判断できた」、「同時に要求される事柄について優先順位がつけられた」、「模擬患者の訴えにあわせた対応ができた」、「専門知識を用いて看護判断ができた」、「技術を安全に提供できた」に設定した。これらを学生に「そう思う」、「ややそう思う」、「あまりそう思わない」、「そう思わない」の4段階で評価してもらった。

その結果、全体的に目標達成度は低い傾向がみられ、「あまりそう思わない」を選択する学生が多かった。「あまりそう思わない」が最も多く選択された項目は、「技術を安全に提供できた」で22人 (50.0%) である。次いで、「同時に要求される事柄について優先順位がつけられた」、「専門知識を用いて看護判断ができた」は、同数で20人 (45.5%) だった。「そう思わない」が最も多かった質問は、「同時に要求される事柄について優先順位がつけられた」で14人 (31.8%) であった。

反対に、「ややそう思う」の回答数が多かった質問は、「模擬患者の訴えにあわせた対応ができた」が18人 (29.5%)、「連絡・報告が必要な状況について判断できた」が17人 (38.6%) だった。

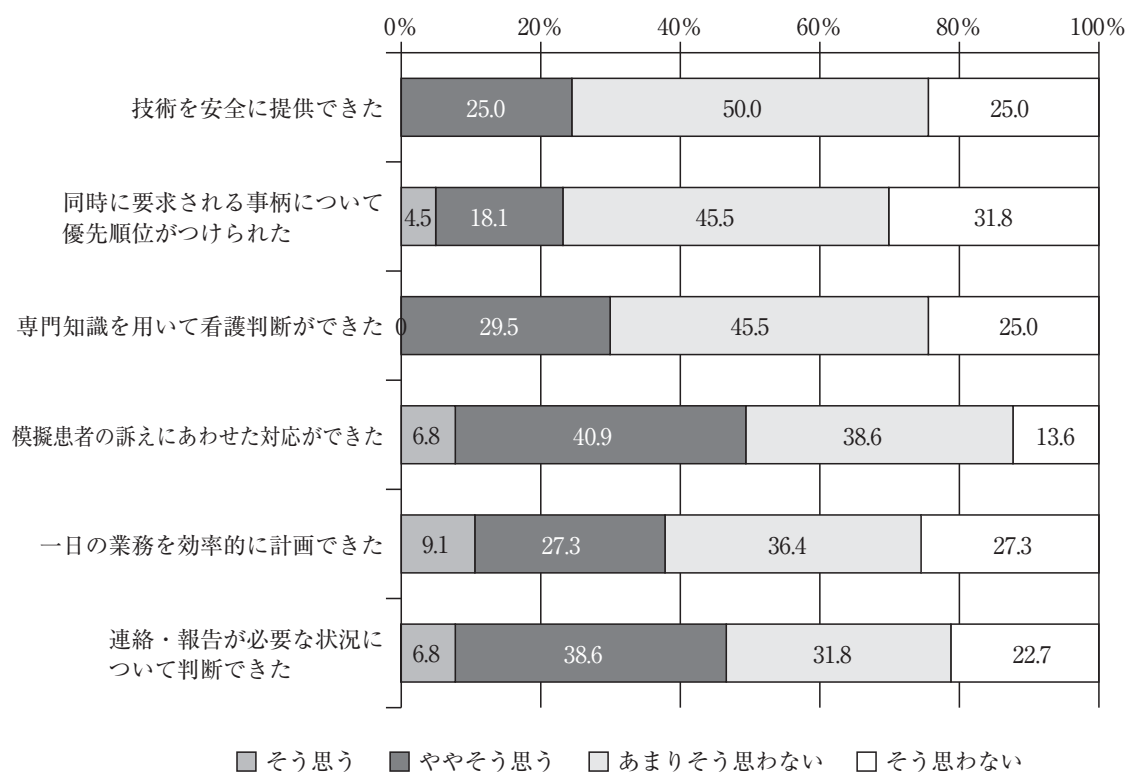


図1 多重課題の目標達成度

2. 演習を通しての理解（図2）

多重課題の経験を通して理解できたことを達成度と同様に4段階で評価してもらった。項目は、「ひとつの援助の前には常に準備が必要であること」、「あらかじめ段取りを考えておく必要性」、「優先順位を決めるときに何を考えたらいいか」、「ミスを引き起こさないために気をつけるべきこと」、「リーダーに報告すべきこと」、「要領のよい報告の仕方」、「落ち着きや冷静さの重要性」、「自分の課題」の

8項目である。

8項目のうち「そう思う」を選択した学生が最も多かった項目は5つあり、中でも「あらかじめ段取りを考えておく必要性」が、43人（97.7%）、次いで「ひとつの援助の前には常に準備が必要であること」は42人（95.5%）で高い理解度を示した。

一方「あまりそう思わない」と答えた学生が多かった項目は、「要領のよい報告の仕方」7人（15.9%）である。

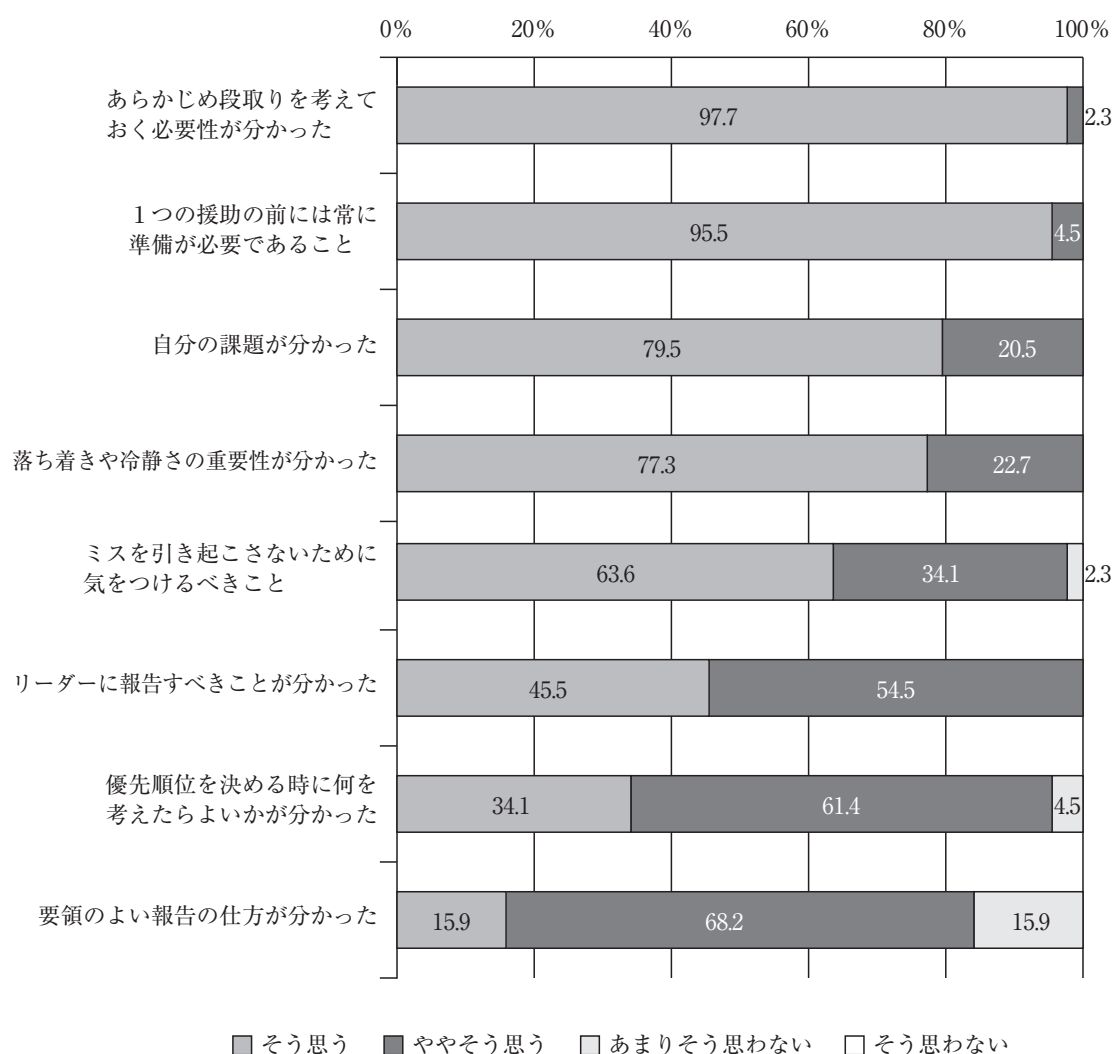


図2 多重課題を通して理解できたこと

3. 多重課題経験後の自己の課題（表3）

多重課題を経験した後の課題を自由記載してもらい、カテゴリー化した。その結果、「看護技術」17件、「準備・計画」13件、「判

断」「精神面」11件、「安全」7件、「対人対応」「知識」3件、「その他」6件であり、計71件であった。

表3 自己課題に関する記載内容

看護技術 17件	<ul style="list-style-type: none"> ・輸液（滴下、エアの対処方法、手技）（7件） ・1つ1つの技術の確実性（2件） ・技術、どれだけ効率よくできるか 	<ul style="list-style-type: none"> ・酸素ボンベの使用方法、酸素管理（4件） ・無菌操作 ・スキル ・車イスの配置
準備・計画 13件	<ul style="list-style-type: none"> ・物品準備を技術の流れを思い描きながら用意し、忘れ物をしない。（2件） ・全体的にみて考える ・計画ややることを事前に確認・準備すること ・自分の技術レベルを把握し、あった計画にする ・段取りの重要性、優先順位の付け方 ・時間をもっと意識できるように ・時間配分 	<ul style="list-style-type: none"> ・準備時間を多くとり行動計画を細かく立てる ・必要物品の準備も手際よく対応する ・物品忘れをなくす ・段取りを考えて、イメージして行う ・点滴準備をすばやく行う
判断 11件	<ul style="list-style-type: none"> ・優先順位の判断、行動（8件） ・判断力 	<ul style="list-style-type: none"> ・必要・不必要の判断 ・分からないことがあったら確認
精神面 11件	<ul style="list-style-type: none"> ・落ち着くこと（3件） ・冷静さ（3件） ・焦らない（2件） ・常識 ・失敗したときの対応 ・Ptの訴えに耳を傾け、目先のことばかりに気をとられないこと 	
安全 7件	<ul style="list-style-type: none"> ・指示通りに動くのではなく、自分でも確認すること ・危険な物品（薬・注射器など）を患者の所に置いたまま離れると危険 ・注射準備～施行までの一連の流れについて必要物品や安全な提供などの技術 ・やるべきことだけでなく、リスクを考えてもっと周りを見れるように ・安全確認、患者の安全・安楽を考えた看護・ケア・準備 ・業務に追われたり、焦っていても、1つ1つの技術をゆっくりでもいいから安全に、正確に行えるようにする 	<ul style="list-style-type: none"> ・安全をよく確認する
知識 3件	<ul style="list-style-type: none"> ・薬の副作用、禁忌の知識（Drの指示が絶対ではない）（2件） ・患者さんに対する説明の仕方（検査や薬の目的、必要性など） ・技術や検査の説明 	
対人対応 3件	<ul style="list-style-type: none"> ・1度にいくつかのことを記憶しながら話を聴く力 ・短時間で頭にカルテの情報を入れ、実際の患者さんの状況と照らし合わせる記憶力（人の名前と顔） ・Ptに言われてことに対して専門知識と状況を兼ね合わせて対処する 	
その他 6件	<ul style="list-style-type: none"> ・すべてにおいて根拠をもって行動できればと思った ・知識・技術 → ミスや不測の事態が起こったときにすぐに考え、対処できる力 ・自分の行動、言動を常に振り返って次に活かす ・効率のよい動き ・報告の仕方（要点をまとめて分かりやすく） 	<ul style="list-style-type: none"> ・知識・技術・判断力

4. 多重課題の意味づけ (図3、表4、表5)

多重課題を経験しての感想を「就職に向けて自信になった」、「就職に向けて心構えができた」、「就職に向けて不安が減った」の3つの項目に対して、「そう思う」、「ややそう思う」、「あまりそう思わない」、「そう思わない」の4段階で評価してもらった。その結果、肯定的な回答が最も多かったのは「就職に向けて心構えができた」で、「そう思う」と「ややそう思う」を合わせると41人 (93.1%) であった。次いで「就職に向けて自信になった」は、「そう思う」7人 (15.9%) と「ややそう思う」を合わせると27人 (60.4%) であった。一方で「就職に向けて不安が減った」には、否定的な回答が多く「あまりそう思わない」と「そう思わない」を合わせると29人 (65.9%) であった。

次に、就職に向けての感情と目標達成の関連をみるために、「就職に向けて自信になった」の質問に対して「そう思う」「ややそう思う」と回答した群を「自信群」、「あまりそう思わない」「そう思わない」と回答した群を

「自信欠如群」とし、目標達成についての各項目評価が「そう思う」「ややそう思う」だった群を「目標達成」、「あまりそう思わない」「そう思わない」だった群を「目標未達成」とし、 χ^2 検定を行った。その結果、自信の有無によって有意に差があった目標達成項目は「一日の業務を効率的に計画できた」($p=0.001$)、「専門知識を用いて看護判断ができた」($p=0.006$) であった。同様に「就職に向けて不安が減った」の質問に対して「そう思う」「ややそう思う」と回答した群を「不安解消群」、「あまりそう思わない」「そう思わない」と回答した群を「不安群」とし、目標達成についての各項目評価が「そう思う」「ややそう思う」だった群を「目標達成」、「あまりそう思わない」「そう思わない」だった群を「目標未達成」とし、 χ^2 検定を行った。不安の解消状況の違いによって有意に差があった目標達成項目は、「一日の業務を効率的に計画できた」($p=0.003$)、「連絡・報告が必要な状況について判断できた」($p=0.042$) であった。

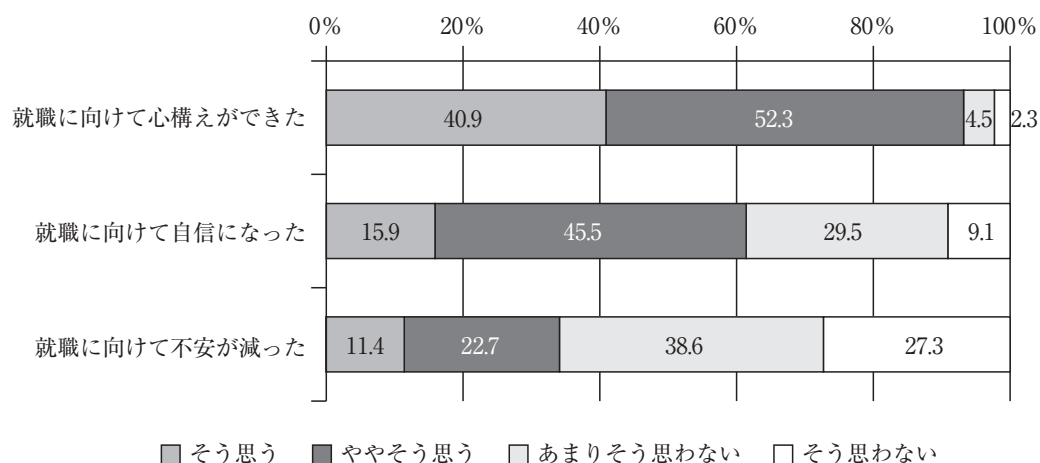


図3 就職への意味づけ

表4 就職に向けての自信の有無と目標達成の関連

		自信群		自信欠如群		p 値
		人	%	人	%	
一日の業務を効率的に計画できた	目標達成群	15	55.6	1	5.9	0.001 **
	目標未達成群	12	44.4	16	94.1	
連絡・報告が必要な状況について判断できた	目標達成群	15	55.6	5	29.4	n.s
	目標未達成群	12	44.4	12	70.6	
同時に要求される事柄について優先順位がつけられた	目標達成群	10	37.0	0	0	n.s
	目標未達成群	17	63.0	17	100	
模擬患者の訴えにあわせた対応ができた	目標達成群	14	51.9	7	41.2	n.s
	目標未達成群	13	48.1	10	58.8	
専門知識を用いて看護判断ができた	目標達成群	12	44.4	1	5.9	0.006 **
	目標未達成群	15	55.6	16	94.1	
技術を安全に提供できた	目標達成群	8	29.6	3	17.6	n.s
	目標未達成群	19	70.4	14.0	82.4	

** p<0.01

表5 就職に向けての不安の有無と目標達成の関連

		不安解消群		不安群		p 値
		人	%	人	%	
一日の業務を効率的に計画できた	目標達成群	10	66.7	6	20.7	0.003 **
	目標未達成群	5	33.3	23	79.3	
連絡・報告が必要な状況について判断できた	目標達成群	10	66.7	10	34.5	0.042 *
	目標未達成群	5	33.3	19	65.5	
同時に要求される事柄について優先順位がつけられた	目標達成群	5	33.3	5	17.2	n.s
	目標未達成群	10	66.7	24	82.8	
模擬患者の訴えにあわせた対応ができた	目標達成群	9	60.0	12	41.4	n.s
	目標未達成群	6	40.0	17	58.6	
専門知識を用いて看護判断ができた	目標達成群	5	33.3	8	27.6	n.s
	目標未達成群	10	66.7	21	72.4	
技術を安全に提供できた	目標達成群	5	33.3	6	20.7	n.s
	目標未達成群	10	66.7	23	79.3	

* p<0.05 ** p<0.01

5. 多重課題への取り組み

多重課題に対する事前学習の状況を「事例の疾患・薬・検査について調べて臨んだ」、「事例にどのような看護が必要かを考えて臨んだ」の2項目に対して「ほぼできた」、「どちらかというときできた」、「どちらかというときできなかった」、「できなかった」の4段階で評価を得た。その結果、「事例の疾患・薬・検査について調べて臨んだ」は、「ほぼできた」と「どちらかというときできた」を合わせると43人(97.7%)、「事例にどのような看護が必要かを考えて臨んだ」は、「ほぼできた」と「どちらかというときできた」を合わせると34人(77.3%)であった。

次に、事前学習と目標達成の関連をみるために、事前学習の「ほぼできた」「どちらかというときできた」と、目標達成について各項目の「そう思う」「ややそう思う」を「目標達成」、「あまりそう思わない」「そう思わない」を「目標未達成」として χ^2 検定を行ったが、有意な差はみられなかった。

6. 多重課題に参加して気づいたこと等、意見や感想(自由記載)

多重課題に参加して気づいたことや意見・感想を自由に記載してもらった。企画についての意見は、「事前にどんな演習かがわからず不安で対応困難だった」(2件)、「物品の置き場所を事前に知れたらもっと時間を有効に使えた」、「思ったより手が込んでいた」、「模擬患者がよかった」であった。企画についての感想は「働いてからの大変さが想像できた」「今まで机に向かってばかりいたので現場感覚から遠のいていた」「臨床で働く心構えが刺激された」「参加しておいてよかった」「正解がないので難しかった」などがあつた。

V 考察

1. 学生の自己評価

多重課題演習の自己評価において、目標達成度は低かった。しかし、学生の「できなかった」は、自分の力量を現実的に捉えることができた結果とも解釈できる。そして、「できなかった」からこそ、自身に不足している能力が「わかった」と評価し、この点に関しては高い理解度を示した。したがって、目標達成度の低さは、問題であるとは言いきれない。多重課題演習は、臨地実習において複数患者を受け持つ経験や業務の優先順位を考えた経験がないからこそ行っている。そう考えると、この企画において「…できる」という学習目標は学生にとって高すぎると言える。

2. 演習目標とその達成状況

質問項目ごとの目標達成状況では、「模擬患者の訴えにあわせた対応」、「連絡・報告の必要についての判断」の達成度は比較的高かった。この2つは、現状の実習においても繰り返し経験してきたことが活かせるものであり、患者の反応やチームの協働に意識を向ける力は他と比べて身につけられていた。

一方、「専門知識を用いた看護判断」、「技術の安全な提供」、「一日の業務の効率的な計画」、「同時に要求される複数の事象の優先順位」は、達成度が低かった。前者2つは実習によって身につけることが可能であるが、後者2つは実習で経験する機会が少ない。習得を意図するならば、そのための教授方略が必要である。

次に、学生の理解度が低かったのは、「要領のよい報告の仕方」、「優先順位を決めるときに何を考えたらいいか」、「リーダーに報告すべきこと」だった。これは、質問が具体的な理解内容にまで言及したために、報告の必要はわかったが報告の仕方まではわからないなど、理解の曖昧さが影響したと考える。

以上をふまえて演習目標を振り返ると、目標Aの「一日の業務を効率的に計画できる」は、必要性はわかったが実践可能なレベルには達していない。目標Bの「連絡・報告が必要な状況がわかる」は、状況はわかるものの必要とされる報告内容は理解できていなかった。目標Cの「同時に要求される複数の事象について優先順位がつけられる」は、できなかった。目標Dの「習得した技術を様々な反応を示す対象との相互関係の中で安全に提供できる」は、対人対応は少しできるが専門的な判断と結びついていなかった。学生のそれまでの経験と力量を考慮すると、目標A・Cは行動レベルではなく認知レベルに変更が必要である。また、目標Dは2つの要素を含むので分割した方がよいと思われた。

3. 多重課題演習企画の評価

自己課題に関する自由記載は49人から71件あり、気づきの多い演習であったと解釈できる。そして、記載内容は、「知識」、「判断」などの認知領域、「看護技術」、「準備・計画」などの精神運動領域、「精神面」、「対人対応」などの情意領域にわたり、広範囲の学びを得た経験になったと言える。

また、就職に向けて自信のついた学生、不安が増えた学生様々だったが、大多数にとって心構えにはなっていた。自信の有無と目標達成との関連では、「一日の業務を効率的に計画できた」、「同時に要求される複数の事象について優先順位がつけられた」、「専門知識を用いて看護判断ができた」と答えた学生に自信をもった者が多かった。不安との関係では、「一日の業務を効率的に計画できた」、「連絡・報告が必要な状況について判断できた」と回答した学生に不安が減ったと答えた者が多い傾向が見られた。そのため、これらの達成度を高める教育の実施が、就職に向けての不安解消や自信につながると示唆された。

4. 今後の課題

ここまでの検討により、学生にとって、全体的に「できなかった」経験でありながらも「できた」ことにより就職にむけて不安解消や自信になったのは、「一日の業務を効率的に計画する」体験であった。2008年度は、学生が多重課題演習を行う前の予備知識の確認が不足していたり、心の準備を整えないまま演習を実施した。また、演習回数も1回なため不達成感の残る体験であったことは否定できない。今後は1日の業務に対する準備の方法や体験回数に検討を加え、成功体験を増やすことが必要と考える。

演習に対する学生の意見に、「事前に演習のイメージがつかずに不安だった」や、「物品の配置がわかっていたらもっと効率的に時間を使えた」があり、課題に集中できる環境づくりは課題となった。また、「模擬患者からのアドバイスも有用だった」とあり、教材となる事例や模擬患者の準備にも充実の余地があると思われた。

VI 結論

1. 多重課題演習は、看護業務遂行にあたって自己の課題を自覚する機会になっていた。
2. 多重課題演習は、就職へ向けて心構えを持つことに役立った。
3. 多重課題演習企画の課題は、①成功体験を増やすための準備の指導、②体験回数の検討、③課題に集中できる環境づくりである。

おわりに

看護の実践力は、知識、技術、状況判断力、そして業務遂行能力が統合されて、はじめて発揮される。したがって、統合すべき要素が整い、かつ、場に応じて統合できる能力

が求められる。この力は、「臨床知」であり、経験を通してのみ、学べる学力である。その意味において、学内での技術教育で実践力を体得するには限界があると言わざるを得ない。しかし、今回、多重課題演習の成果からシミュレーションの効果を確認することができたので、明らかになった課題に取り組んでいきたい。

なお、この研究の一部は、平成21年度新潟青陵学会学術集会示説で発表した。

が身につけておくべきもの 新卒看護師と臨床側の認識の比較. 月間ナーシング. 2009 ; 29 (3) : 92-97.

注・参考文献

- 1) 稲垣美紀, 土居洋子, 西上あゆみ. 卒業直前の看護学部学生の看護技術自己トレーニング効果. 大阪府立看護大学紀要. 2004 ; 10(1) : 23-29.
- 2) 橋本さき子, 斉藤和香子, 古屋敦子他. 学生の習得度を踏まえた看護技術教育の強化【1】—卒業時の基礎看護技術習得状況. 看護教育. 2006 ; 31(8) : 94-101.
- 3) 古屋敦子, 橋本さき子, 斉藤和香子他. 学生の習得度を踏まえた看護技術教育の強化【2】—卒後看護技術フォローアップ演習の実施. 2006 ; 31(9) : 98-102.
- 4) 山居輝美, 登喜和江, 坂本雅代他. 卒業前看護技術トレーニングの効果—実施直前と就職後1ヵ月のアンケート調査より—. 大阪府立大学看護学部紀要. 2006 ; 12(1) : 11-22.
- 5) 本間昭子. 卒業前看護技術トレーニング実施・成果. 看護展望. 2007 ; 32(4) : 42-46.
- 6) 齋藤茂子, 清水順子. 学内演習と臨地実習の位置づけをどう考えるか—卒後を見据えた学内演習の強化・実習の新たな展開. 看護展望. 2008 ; 33(3) : 14-21.
- 7) 清水恵子, 村松照美, 萩原結花他. 「卒業時看護技術演習」の具体的展開と成果. 看護展望. 2008 ; 33(13) : 25-35.
- 8) 柳原典枝, 粕谷緑, 中田康夫他. 新卒看護師